

ロシア通詞志賀親朋

日守 孝良

幕末から明治の一時期、ロシア通詞として、日露外交に関係した志賀親朋に興味を持ち、先学の研究者の論文を読み、墓地調査、新聞記事の検索、志賀家の子孫の方にお尋ねをした。独自の史料の発見や知見はないが、私なりに志賀親朋の生涯をまとめてみた。

志賀親朋は、天保十三（一八四二）年十一月八日に生まれた。家は代々浦上淵村の庄屋で、父は志賀親憲（和一郎）、母は沙波といい、親朋はその長男であった。親朋の通称は浦太郎といい、親朋は明治二年以降称したみだいである。幼少の頃、長崎の地で長川東州、長川幹二に漢学、井原又十郎に真影流剣術、高木善右衛門に砲術・馬術を学んだ。

嘉永六（一八五三）年七月、ロシアの使節プチャーチンが長崎に来港し、その折ロシア軍艦の乗組員の休憩所として、長崎淵村稲佐悟真寺を提供することになった。其のとき、通詞としては、西吉兵衛・志築竜太・森山栄之助・本木昌造などが応対している。これらの出来事を契機に、志賀親朋はロシアとのつながりを持つことになった。安政元（一八五四）年親朋は、淵村庄屋見習いとなり、稲佐郷石炭囲所・鮑浦製鉄所置付品取締に任ぜられた。



長崎版画（ワロシヤ人）

安政五年ロシア船が長崎に入港した時、稲佐滞留の露艦アスコリド号の海軍士官ムハーノフから露語を学び、また、ゴシケヴィツチ（初代の箱館駐在のロシア領事）やゴンチャロフ

ようにこの通訳のことをリアルに語られている。彼にとっても最も晴れがましい、栄光の思い出だったと思われる。

明治七年、初代駐露公使榎本武揚に随行し、外務三等書記官としてロシアに赴いた。このとき、アレクセイ親王を代父としてロシア正教の洗礼をうけており、洗礼名をアレクサンドル・アレクセーエヴィチ・志賀といった。

明治十年頃、官を辞して長崎に帰った。住居は稲佐の志賀の波止と呼ばれた入江にあった（現在の旭町一三番地。旭大橋稲佐方面入口カーブ下、旭町公園付近）。明治十六年西彼杵郡より長崎県会議員に当選し、明治二十年まで務めた。長男親光が生まれたのは、明治十九年で、親朋四十四歳、妻佐多三十七歳の時の子である。

明治二十年代の話だが、親朋はロシア人ヴラジミール（元素の周期表を発見した有名な化学者メンデレーエフの息子）との間に一女をもうけた日本人妻秀島タカの手紙をロシア語に翻訳してやっている。

明治二十一年、ロシア皇帝から神聖アンナ第三等勲章を授けられた。この勲章の所在について、志賀親信氏は、この勲章かどうかはわからないが、皇帝から戴いたものを、太平洋戦争中に供出したという話を、聞いたことがあるという。

淵神社にある桑姫墓、天女廟碑等は、明治三十三年志賀親朋によりこの地に移築された。明治三十九年日露協会长崎支部長を務め、大正元年露艦アスコルド号が長崎に来航したときは、副艦長と会っている。

大正五（一九一六）年九月二十日に没した。墓地は稲佐悟真寺の後山にある。墓碑は神道の形式によっているが、神道への改宗は、明治の初め、神仏分離令が出た折、親憲が行ったものと伝えられている。親朋の直系の子孫は、子の親光（明治十九年〜昭和十四年）、孫親大（大正四年〜昭和十年）で絶えている。現在、長崎の志賀家の墓は、親朋の弟であった親賢の曾孫の親信氏によって管理されている。

（元県立島原商業高等学校長）

（プチャーチン提督の秘書官、『日本渡航記』の著者）からもロシア語の指導を受けた。

文久元（一八六一）年二月、露艦ボサードニク号による対馬占拠事件が起きたとき、親朋はロシア領事館付きの通詞となり、翌年三月まで勤めた。

文久二年三月箱館奉行組下組同心（二十俵二人扶持）となり、箱館奉行所の下級武士や足輕にロシア語を教授している。慶応元（一八六五）年七月遣露留學生が露艦ワリヤグ号で函館を出帆した。親朋も一行に加えられていたが、後にはずれた。その理由には諸説ある。

慶応二年十月、親朋は日露国境交渉のため、外国奉行兼箱館奉行小出大和守に随行し、横浜を出発した。この時の親朋の肩書きは函館奉行支配定役格通弁御用となっている。一行は上海、香港、シンガポール、スエズなどを経て、マルセイユに十一月末に到着した。ついでドイツやフランスでは、一行はビスマルクと面会し、ナポレオン三世とも謁見した。パリに一週間ほど滞在したが、当時のフランスの新聞は、一行がオペラ座見学を興味深く行ったことや、志賀親朋がフランス語も上手に出来ることを伝えている。十二月十二日露都ペテルブルグに到着し、二十日ロシア皇帝アレクサンドル二世に謁見した。国境交渉の会談は、翌年一月から二月にかけて行われ、サハリン等仮条約が結ばれ、志賀親朋は、使節団の一人として、ロシア側から記念に金時計と双眼鏡を贈られている。一行は、五月七日横浜に到着した。帰朝後、長崎奉行支配調役並（百俵五人扶持）となった。

親朋は明治二（一八六九）年から明治十年一月まで外務省に勤め、千島・樺太の交換談判にも携わり、明治五年露国アレクセイ親王来日の際、天皇と親王の通訳の任にあたった。晩年の親朋の回顧談では、手に取る

風信

○今年も後一ヶ月で諸事おわる事になる。過去は過去、来年はどんな年になりましょうか。

○十一月三日、新しい文化施設として長崎歴史文化博物館が開設された。私共の長崎歴史文化協会と何か関係がありますかと各方面から良く質問される。別に関係はないのですが、共に長崎の歴史と文化を考究し社会に貢献しようと言う趣旨は変わる所は無いと考えている。

それにしても立派な施設であり資料も充実しており是非一度は訪れて見るべき文化施設博物館である。

○本会で古文書を指導して下さっている宮田修二氏。昨年は、昔の「長崎白菜」を復活され、本年は、引き続き古い「片淵蕪」を再生された。

其の片淵蕪の種は唯一・片淵の杉本家に残っていたと言われる。長崎の正月料理には、片淵蕪の強い紅色に染った三杯酢が必ずあった事を思いだす。

○先月実施された本会主催の第十六回中国研修会の感想文の一つに、「最近では中国の各農家で何処も、おとなしい黒い中型の犬が飼っており、私達に尻尾をふって出迎えるのです。この光景をみていると、私達は中国の農家にゆとりある豊かさを感じるのです」と記してあった。

○今月は次の四冊の本を戴いた。

一、長崎歌人会長の久保美保子女史より「第十集長崎歌集」、三二四名の代表作が集められていた。

二、「鯨と生きた人生」日野洋二氏著。日野氏らしい闊達な人生感であった。（長崎文献社刊）

三、「みさき道を歩く」橋本幸雄氏が実際に歩かれた長崎より野母脇岬観音寺までの所謂「みさき道」を、江戸時代の資料を引いて説明されている。頭の下がる思いがした。

四、対馬嚴原の小松勝助先生より雨森芳洲没後二五〇年記念特集号「雨森芳洲先生」を頂戴した。編集は永留久恵先生、多くの資料写真が集録され大いに参考になった。

